

## 温故知新

川名将義

～ 阿部青鞋に触る

### ◆◇ 第一句集「火門集」

すね牛をひきのぼしたる桜かな  
かたつむり踏まれしのちは天の如し  
虹自身時間はあると思いきり  
人間を撲つ音だけが書いてある  
うわさにも立たぬ青さや秋の空  
葱の葉のなかをのぞけば朗かに  
水郷の歯ぐきのあやめ枯れにけり  
寒雀みなあらわれてしまいきり  
感動のけむりをあぐるトースター  
この道の午前十時はすっぱきかな

### ◆◇

### ◆◇ 第二句集「続・火門集」

手も氷るばかりの螢火をつかむ

精神を変へずに食ふや竹の子を  
なか指にしばらく水をのませけり  
眼前にとまりしバスを嗅いで乗る  
手の腹はまだよく知らぬところかな  
うかんむりのそらを見乍ら散歩する  
足あげたまゝ永久に潮干狩  
いっぼんの春の雨しか降らぬかな  
かゝりたるものの見てゐるかすみ網



◆◇ 第三句集「ひとりたま」

大野火の中より誰か燃えきたる  
食欲はひよつとベンチのやうなもの  
横たはる葡萄の房はくやしかり  
なつかしくなるまでからだ縮めをり  
くちびるをむすべる如き夏の空  
あめつちを俄かに思ふくさめして  
想像がそつくり一つ棄ててある  
くさめして我はふたりに分れけり



今回採り上げた阿部青鞋は「アベセイアイ」と読む作家である。  
決して青蛙（アオガエル）ではないのであるが、そういう類の誤植が多いと聞く。  
それほど知られていない作家とも言える。  
青鞋の「鞋」は草鞋（わらじ）のことで、「鞋」の一字でもわらじと読む。  
すなわち、いつも青藁で編みたての鞋でいるということであろう。  
阿部青鞋は大正三年（一九一四）に東京で生まれ、平成元年（一九八九）に七十四歳で鬼籍に入っている。少年時代に寺の養子となり、得度して僧侶になったが、その後還俗し戦後は牧師になった経歴は、その俳句とともに異色である。

阿部青鞋を知ったのは何時の事であったか記憶が定かではないが、多分、大岡信著「百人百句（講談社刊）」に、夏の季語の部で「虹自身時間はあると思いきり」が採り上げられており、その一句に強い印象を持った時からだと思う。

虹自身時間はあると思いきり          阿部青鞋

虹は自然現象の中でも特に美しく、春夏秋冬のすべての季語に収められている。  
例えば

野の虹と春田の虹と空に合ふ    水原秋櫻子  
虹二重神も恋愛したまへり    津田清子  
秋虹のかなたに睦べ吾子ふたり    能村登四郎  
冬の虹消えむとしたるとき気づく    安住 敦

のように、虹を神格化したり、自分の心象として詠んだりされている。だが青鞋の虹のように虹自身の内側に入り込んで、ある面では哲学的とも思える思考を暗示してい

---

る句は他にないのではなかろうか。そのあたりを大岡信は「通常、時間は数字で表現できるものである。ところがこの句は、数字で表現できるものとは違う時間があるということのを思い知らせてくれる」と述べている。

虹というものを我々は現われたらすぐに消えてしまうものと思っている。だが虹自身は消えることを前提としながらも、まだまだ時間はあると思っている。このギャップそのものが、虹＝人の一生であると気づくとき、読者はハッとさせられ、考えさせられる。

人の一生は邯鄲の夢と例えられるように、虹ほどに儚く、現われてはすぐに消えてしまうほどの時間である。にもかかわらず、人は、まだまだ時間はあるよ、まだまだ若いのだから… と思いがちである。そうやって時を浪費（消費）しているうちに、気づいたときにはすでに老境にあり、行動を起こすにも、何かを決意するにも、取り返しがつかないところまで来てしまった。あとは晩節を汚さないようにして消えるとき（死ぬとき）を待つだけだという諦念感に襲われるのが大勢である… とこの句は語っている。

だが、この句がそのような重くれない句に感じさせないのは、人間の哀れさの中に潜む滑稽さが滲み出ているからではなかろうか。換言すれば滑稽というものの持つ意味の、深いところを衝いているのである。

青鞋は自らの作句身上と俳句観について「人間が生きる上に、何でも無いことは先ず無い。何でもなさそうな事も、みな何でもある。全て何でもあるものが、何でもなさそうな顔をしているそのおかしさを、私は私なりのありていな言葉で言ってみただけだ。」と述べている。

青鞋の句について、私の連句の世界での知人である妹尾健太郎氏が纏められた、「俳句の魅力・阿部青鞋選集（沖積舎刊）」の中で、永田耕衣と加藤郁乎の評論が目

---

を惹いたので抄録してみた。

「火門入門鈔」 永田耕衣

(略) さて何とかかんとか文句をつけてみても、阿部青鞋氏はうまい作家である。うまいといえる中に稚拙さがいっぱいあることを私は好むが、阿部氏のばあいは妙に談林調が阿部流に消化しきられているうまさを指摘しておく方がよい。それも一種の稚拙味かもしれぬ。

白き葱あゝ含羞を失えり  
葱の肌白くて白もいらぬかな  
ころがっているのは葱か愛情か  
葱の葉のなかをのぞけば朗かに  
愛憎を増すため葱をくうという  
いたずらをしたるが如く葱白し

葱の扱いはまったく型やぶりである。型やぶりながらどこか類型的でもあるが、ことに「白くて白もいらぬかな」「葉のなかをのぞけば」「いたずらをしたるが如く」などには、談林の精神が現代的に洗練された美事さをみる。(以下略)

「火珠俳言」 加藤郁乎

食欲はひよつとベンチのやうなもの  
あめつちを俄かに思ふくさめして  
或るときは洗ひざらしの蝶がとぶ  
洪水はもしくは鼻毛などに似て

子規以降、いや、新興俳句のあと、戦後このかた、何々俳句のたぐい出ては消え興亡慌しいばかりだったが、なぜか俳諧本来の品柄を吟味し直す新談林の風は一向に起らず味気ないかぎりであった。阿部青鞋の俳句にはじめて接した折ふしは気づかなかったように思うが、そのうち次第に、この多産の作家の上に談林俳諧の新しき継承発展がゆるゆると確実に成されつつあるを感じとりよろこんだ。(以下略)

両氏は青鞋の句を談林風と評している。私も青鞋は言葉をあやつり、言葉の芸を見せてくれる作家と思えてならない。

ただ、私は彼を近代の談林風俳諧（滑稽）作家として位置付けたい。なぜならば彼の談林風俳諧（滑稽）が詩的に文芸的にさらに輪廻転生されて、高度な現代談林風俳諧（滑稽）として出現させた作家が、攝津幸彦だと思うからである。

さやうなら笑窪荻窪とろろそば

幾千代も散るは美し明日は三越

美しき腰遅れつゝ輪廻せり

---

などをはじめ、青鞋の言う文学にならない言葉の芸を、現代の談林風として煌びやかに展開してくれた。まるで青鞋が転生して幸彦になったかのように。だがこの二人はすでに俳壇にもこの世にも存在していない。

青鞋、幸彦と転生していった近代と現代の談林風は、近未来談林風としてどんな作家に転生してゆくのであろうか。ぜひこの滑稽俳句協会の作家の中から、高度な滑稽を包含した、現代の談林的俳諧（滑稽）作家が出現する事を切望して止まない。